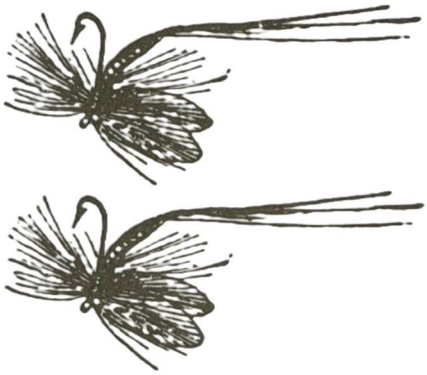
出会いの午後

ヴァイオリンとピアノとの出会い



２０２４年５月１１日

開演：14：00

hayakawa ホール

プ　ロ　グ　ラ　ム

W.A.Mozart （1791～1844）

Sonata für Klavier und Violin K.V.306 D D-ur

W.A,モーツァルト　ピアノとヴァイオリンのためのソナタ　ニ長調

F.Schubert （1797～1828）

Rondo 0p.70 h- moll

F.シューベルト 「ロンド」　ロ短調

L.v.Beethoven （1770～1827）

Sonata für Klavier und Violin Op.24 F-Dur

“ Frühling“

L.v.ベートーヴェン　ピアノとヴァイオリンのためのソナタ　ヘ長調「春」

プロフィール

水島　愛子（ヴァイオリン）

３歳より中村太郎、鈴木鎮一両氏の下でヴァイオリンを始め、後に宗倫安氏に師事。桐朋学園大学音楽部弦楽科を卒業後、ウィーン国立音大で Edith Steinbauer、Franz Samohyl、室内楽を Aifred Staal　に師事、同大学を最優秀で卒業。1971 年 Josef Haydn 国際弦楽四重奏コンクール（ウィーン）にてプリマリウスを務め１位入賞。同年 J.S.Bach 国際コンクールヴァイオリン部門特別賞受賞。

ニュールンベルク饗、ミュンヘン室内楽合奏団を経て 1976 年～2010 年までバイエルン放送交響楽団第一ヴァイオリン奏者。1984 年～1996 年サイトウ・キネンに参加。2011 年～2018 年３月まで東京音楽大学、オーケストラ、室内楽客員教授。

兵庫県芸術文化センター・オーケストラ、ミュージック・アドヴァイザー。

子供の指導に力を入れ、オーストリアを始めミュンヘン近郊にて音楽夏季講習 musaic atelier für Kinder を毎年開催、2017 年より Villa Sawalisch にて室内楽講習会も開催。2020 年兵庫県文化文化功労章を受章。2023 年より室内楽大磯を主宰。

平沢　匡朗（ピアノ）

桐朋学園大学卒業。福元さざれ、中山 靖子、渡邉 康雄、デートレフ・クラウスの各氏に師事。ＧＰＡダブリン国際ピアノコンクール特別賞受賞。各地よりピアノ協奏曲のソリストとして招かれたほか、ダブリン、ウィーン、東京など国内外においてのピアノリサイタル、NHK・FM『FM リサイタル』などの放送出演など、独奏者として幅広く活動している。1996 年より《Allegro Vivo・オーストリア国際室内楽音楽祭》に参加、22 年にわたり音楽祭のコレペティトゥーア（公式伴奏者）として活動、多数のヨーロッパ若手演奏家と共演しており、その経験から得た独奏者として独自の解釈と視点による、モーツァルト、ベートーヴェン等ウィーン古典派音楽の演奏には定評がある。

チェンバロ奏者としても 2011 年 9 月には日本フィルハーモニー交響楽団とバッハのブランデンブルク協奏曲第 5 番を演奏、2015 年、18 年、19 年、20 年にはバッハのゴールドベルク変奏曲全曲コンサートを開催、また指揮者としても 2015 年王子ホール、2017 年東京文化会館でピアノ、指揮の 2 役によるモーツァルトのピアノ協奏曲の演奏会を開催している。

現在、愛知県立芸術大学講師、洗足学園音楽大学講師として後進の指導にもあたっている。

モーツァルト：ヴァイオリンソナタ第 30 番 ニ長調 KV.306

モーツァルトのヴァイオリンソナタの最初の作曲は、8 歳の時にパリで出版された KV.6 と 7 の 2 曲のソナタに遡る。よく知られているように、「ヴァイオリンの助奏付きクラヴサン（ピアノ）ソナタ」と題されたこれらの作品は、ヴァイオリンから旋律を弾き出すことはないし、ヴァイオリンのパートはピアノの右手より高い音域に出ることはない。あえて言ってしまえば、ヴァイオリンのパートを省いて演奏することも可能である。これが当時始まった新しいスタイルの音楽であり、今日我々がこのジャンルに期待する、ヴァイオリンと鍵盤楽器のための二重奏曲（ソナタ）とは違ったものであった。

モーツァルトのヴァイオリンソナタの第 23 番までは、少年期の、こういったスタイルの作品、および偽作で占められ、今日あまり演奏されることはない。

これに対して、モーツァルト 22 歳前後に書かれた、第 24 番以降の一連のソナタ（KV.296 および KV.301～306 の所謂「マンハイム・ソナタ」）では、ヴァイオリンにもより積極的な活躍の場が与えられて、今日の「デュオ・ソナタ」のスタイルに近いものになっている。

これらのソナタは、モーツアルトが就職活動のために出た旅先のマンハイムで書き始められたので、このように呼ばれる。その多彩な着想は、当時の音楽の先進地マンハイムで知った、様々な音楽を吸収した成果だとも言われる。KV.301 から 303 まではマンハイム滞在集に完成、KV.304 以降の 3 曲も、次の滞在先パリで書き上げたと言われる。モーツァルトは 6 曲まとめてパリ「作品 1」としてで出版し、プファルツ選帝侯妃マリア・エリーザベトに献呈されている。

今宵演奏される KV.306 は、6 曲のソナタのなかで最も規模が大きく、唯一 3 楽章構成であり、ヴァイオリンとピアノはより対等な位置で競い合うように書かれており、第 3 楽章には、例外的な「カデンツァ」が置かれ、協奏曲のような発想を持っている。

シューベルト：華麗なるロンド ロ短調 作品 70 D895

1826 年の作品。この年からシューベルトは度々体調不良に見舞われるようになるが、一方でいくつかの重要な傑作を生み出している。ウィーン楽友協会に大作「交響曲第 8（9）番ハ長調（通称『ザ・グレート』)」を提出、わずかの謝礼を得るも演奏されることはなかった。そのほか、ピアノソナタ第 18 番「幻想」も作曲された。

この作品は、翌年の「幻想曲」D934 同様、チェコのヴァイオリニスト、ヨゼフ・スラヴィーク(1806-1833)のために書かれたと思われる。前年プラハでのコンサートを成功させたスラヴィークは「ボヘミアのパガニーニ」とまで称えられる名手であり、この作品が要求する難技巧もスラヴィークを想定したものだと言われている。初演も、1826 年ウィーン楽友協会で、スラヴィークのヴァイオリン、ウィーンの名手ボクレットによって行われた。

ベートーヴェン：ヴァイオリンソナタ 第 5 番 ヘ長調　作品 23「春」

ベートーヴェンは生涯に 10 曲のヴァイオリンソナタを残している。これらはピアノソナタに比べると、作品が初期に偏って書かれてはいるものの、やはりここにはベートーヴェンの芸術家としての、作風の発展深化の跡をたどることが出来ると言える。またこれらは同時に、もともと古典派に於ける「ヴァイオリン助奏つきのピアノソナタ」から出発しながら、モーツァルトによってアンサンブルの可能性をより広げた諸作を受け継ぎ、不断の創意を投入することによって、よりヴァイオリンの重要性を増しつつ、新しい二重奏の地平を切り開き、ロマン派のソナタへの道を開いた傑作群である。

ヴァイオリンソナタ 第 5 番 ヘ長調は 1800 年から翌 1801 年にかけて書かれた作品。同じ頃「第 1 交響曲」「ピアノソナタ・月光」等の作品が生み出されている。このソナタは、「ヴァイオリンソナタ 第 4 番 イ短調　作品 23」と共にモーリッツ・フォン・フリース伯爵に捧げられている。2 作とも、やり方の違いはあれ、両楽器のより内的、緊密な結びつきを見せており、それまでのヴァイオリンソナタの諸作から、アンサンブルの新しいあり方への志向が強く打ち出されている。

この曲は、ベートーヴェンの作品の中でも特に名高く、そのメロディの美しさは、ベートーヴェンの別の 1 面を感じさせるといえる。全部で 4 つの楽章からなっているが、筆者の友人で、オーストリアのヴァイオリニストがいっていた言葉をここで紹介したい。

「第 1 楽章はヴァイオリンを使って物語を語る。第 2 楽章はヴァイオリンを使って夢想する。第 3 楽章はヴァイオリンを使って踊りを踊る。第 4 楽章はヴァイオリンを使って人々が一体化する。」